

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370466

研究課題名(和文) フランス語文型体系の抽出：統辞機能・語彙と他動性・属詞性を基軸として

研究課題名(英文) The System of Sentence Patterns in French: On the Basis of Syntactical Functions-Lexicon and Transitivity-Complement

研究代表者

敦賀 陽一郎 (TSURUGA, YOICHIRO)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：30155444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：文構成の基本には文型があり、フランス語の文型は他動詞、自動詞、代名動詞、受動、属詞動詞、非人称動詞、非動詞述辞に基づく。方向性位格は中核項に相当し、項の「必須性」だけでは文型限定の規準とはならない。他動と属詞が重要で他はこれらと密接な関係を保つ。

「主辞-述辞-直接目的-属詞」構文で属詞が名詞、形容詞に相当するものは「第二直接目的」とするのが統辞機能的には適切である。属詞の範列には種々の要素が含まれていて、この構文自体がより大きな構文の下位クラスに過ぎない。属詞自動詞文での形容詞属詞の「二重主題」や非人称構文で主辞なしの属詞の認定は注意すべきである。

研究成果の概要(英文)：Sentence patterns are a fundamental of sentence construction. French sentence patterns are based on transitive, intransitive, pronominal, passive, impersonal verbs and nonverbal predication. Directional locatives correspond to nuclear arguments. And a constituent's indispensability alone cannot necessarily identify one sentence pattern. Transitivity and complement, with which the others are closely related, are particularly important.

It is functionally appropriate to consider as second Direct Object the complements corresponding to nouns and adjectives in "Subject-Predicate-Direct Object-Complement" construction. In complements' paradigms there are various elements and the construction itself is included in a larger subclass of constructions. It is necessary to identify carefully the double thematization of adjectival complement in intransitive complement sentences and which part is complement in impersonal constructions without personal subject.

研究分野：人文学

キーワード：文型 直接目的 間接目的 方向性位格 必須性 属詞 二重主題 非人称

1. 研究開始当初の背景

文構成の基本に文型があることは基本的に認められているが、文型全体を正面から捉えた研究はフランス語学の分野ではフランス語圏においても多くはない。本研究は文型への本質的関心が出発点になっていて、これまで主に科学研究費の補助 (1994-96, 2001-03, 2006-08, 2010-12 年度) を受けて継続してきた研究もこの問題に焦点が絞られている。フランスにおいては、L. Tesnière: *Éléments de syntaxe structurale*, 1959, J.-Cl. Corbeil: *Les Structures syntaxiques du français moderne*, 1971, G.-R. Roy: *Contribution à l'analyse du syntagme verbal*, 1976, が主なものと言える。

本研究は、文構成の基本的構想としては、A. Martinet (*Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, *Syntaxe générale*, 1985) の「機能統辞論」による統辞機能を主たる操作概念として用いつつ、Z. Harris (*String Analysis of Sentence Structure*, 1962, *Mathematical Structure of Language*, 1968) を基盤とする M. Gross (*Méthodes en syntaxe*, 1975) の「語彙・文法モデル」の動詞構文の網羅的分析を重要な指針としている。文型分析の成果としては Gross グループの、個別の構文分析 (J.-P. Boons, A. Guillet, Ch. Leclère: *La Structure des phrases simples en français, Constructions intransitives*, 1976, Boons, J.-P., A. Guillet, Ch. Leclère: *La Structure des phrases simples en français, Constructions transitives locatives*, 1992, 等) と、未完ではあるが、*Index du DELAS.v08 et du Lexique-Grammaire des verbes*, 2 tomes, 1997 が目立っている。

また、フランス語動詞構文辞典としては、上記のもの以外では J. et J.-P. Caput: *Dictionnaire des verbes français*, 1969, W. Busse et J.-P. Dubost: *Französisches Verblexikon*, 1977, J. Dubois et F. Dubois-Charlier: *Les Verbes français*, 1997, 等、最近の L. S. Florea et C. Fuchs: *Dictionnaire des verbes du français actuel*, 2010 を含めると、計 8 種出ている。

2. 研究の目的

本研究の着想・目的としては、次の点が挙げられる。1. 文型体系の理論的考察を深める。2. 作例ではなくてコーパスの実例を基本として構文の可能性を追求する。3. 各文型の頻度を明示して体系の実際を明らかにする。4. 非動詞文の文型も対象とする。

文構成の核には文型の体系がある。フランス語の文型には他動詞、自動詞、代名動詞、受動、属詞、非人称、非動詞文、等の型があり、他動構文が圧倒しつつも属詞構文が重要性を保っている。他の文型はこれら二構文との関係が深い。他動性 - 態、属詞性 - 非動詞文の関係を見直し、他動性と属詞性を基軸と

して構文特徴を厳密化し多様な構文型を整理して、フランス語文型体系全体の抽出を試みる。

先ず、文型分析の理論的基盤を固めること。その際、他動性と属詞性の概念が基本になる。他動性は態との関連が、属詞性は他動性、非動詞文との関連が鍵になると考えられる。それで、他動詞と受動態との関係、他動詞と代名動詞との関係、他動詞と自動詞 (N_0 -changer- $N_0 \leftrightarrow N_1$ -changer) との関係、他動詞と非人称構文 (N_0 -étonner- $N_1 \leftrightarrow Il$ -étonner- N_1 - N_0 : Il m'étonne qu'elle ne soit pas revenue) との関係进行分析する。

次に、これまで 10 種の文型 (下位区分もある) を認めて来た。1. 完全他動詞文 (人称主辞と少なくとも直接目的の一つ)、2. 不完全他動詞文 (人称主辞と少なくとも間接目的の一つ。直接目的なし)、3. 代名動詞文 (人称主辞と代名動詞)、4. 受動文 (人称主辞と受動態)、5. 自動詞文 (人称主辞と自動詞。他の主要項なし)、6. être 以外の属詞動詞文 (人称主辞と非 être 動詞と属詞)、7. être 文 (人称主辞と être)、8. 非人称文 (非人称主辞 II / Ce と動詞)、9. 無主辞定形動詞文 (N'importe, 等)、10. 非動詞文 (定形動詞なし: De là, la Révolution française, 等)。これらの内、3 (代名動詞 = 中動)、4 (受動) と 1 (他動詞能動) との関係、7 の大半と 6 との一体化 (属詞構文として統一)、9 の 8 への組み込み (9 は限られる) を考慮して、次の 6 種にまとめる可能性を考える。i. 完全他動詞文 (能動態、代名動詞、受動態) ii. 不完全他動詞文 iii. 自動詞文、iv. 属詞自動詞文、v. 非人称文 (多くは iii, iv との関係が深い)、vi. 非動詞文。

3. 研究の方法

(1) これまでの文型研究の見直しも兼ねて、先ず、文型を限定する規準の洗い直しを実例分析により行う。文型限定の規準の基本は文の当該構成要素が「一下位クラスの述辞を選択するのに役立つか否か」という点にある。例えば、直接目的 (On prend cela) は形と述辞との結びつきが強く一下位クラス (かなり大きなものではあるが) の区別を明確に行う。これに対して位格は問題になる。Luc rencontre Léa à Paris, Luc va à Paris, Luc met sa voiture au garage で第一文の à Paris は任意のもので、構文を特徴づけられないことは明白である。ところが第二、三文では意見が分かれる。三つの位格とも代名詞 y により置き換わる点は同じであるが、二つ目と三つ目は方向性を持つ特徴的位格である。両動詞の位格の範列 (paradigme) を調べれば (これは正に実例調査) 構文にさらに特徴的な要素が見つかる。「方向性位格は間接目的 (= 特有機能)」が我々の判断である。方向性位格は具体から抽

象まで様々な段階があり、文型体系でも重要な位置を占めていることが具体例調査でも明らかになる。

(2) 文型体系で圧倒的位置を占める他動詞能動文型（直接目的かつ/または間接目的を取る）と他の文型との関係を、態（受動文型、中動（=代名動詞）文型）と非人称文型（非人称代名動詞、非人称受動もある）の調査を行う。態は基本的に述辞（*prédicat*）に対する拡張（*expansion*：ここでは直接、間接目的）の方向付けの区別である。主辞と直接目的が標準的に述辞に向いているか（能動）、直接目的が主辞の位置に来て主辞は消えているか（受動と代名動詞）、あるいは、主辞の位置を非人称の *Il* が占めて主辞が直接目的の位置に来るか（*Un accident arrive — Il arrive un accident*）、等といった構文の再編に関係している。例えば、*dire* の場合、*On dit des bêtises — Des bêtises sont dites — Des bêtises se disent — Il se dit des bêtises* のような構文間の関連が考えられるが、コーパス中での分布は極端に偏っていて、非人称構文はあまり期待できないだろう。既存の動詞構文辞典においては *dire* の項に非人称構文は勿論のこと、受動の構文も見られない。

(3) 文型体系のもう一つの柱である属詞性と他文型との関係を調査する。つまり、属詞性と他動性、属詞性と非動詞文、他動性と非動詞文との関連の問題である。

属詞性と他動性については、まず、属詞（*Il fait chaud* は属詞か？）と直接目的（*Il fait du vent*）の区別、次に、属詞自動詞文型（*Luc est gai; Son fils est Luc*）と属詞他動詞文型（*On le trouve gai; On appelle son fils Luc*）との関連がある。一番目の問題については、基本的に両機能は混同されえないというのが我々の見通しである。二番目の問題は属詞他動詞の直接目的の属詞に *être* を想定するか否かという点である。これも *être* の想定は不必要とするのが我々の見通しである。

(4) 文型を特徴づける要素の規準として「不可欠性」が問題になる。例えば、*Luc se comporte bien* の副詞 *bien* がある。副詞は原則として全述辞に係り、述辞構文の一下位クラスを特徴付けないというのが我々の分析である。*bien* はあらゆる述辞に結びつき、その述辞の構文型に関わることはないが、逆に *se comporter* の方が *bien* のような様態副詞（句）を必要とする。しかし、これは個別意味的結びつきであり構文型を限定しない。つまり、*bien* が一下位クラスの述辞を選択するには至らない。事例ではどうであろうか。

(5) 文型全体を吟味し、10 文型から 6 文型への還元を検討する。文型辞典の編纂に当たっては 10 文型を明示するのが良いという判断であるが、それらが基本的には 6 文型にまとめられるか否かは文型体系分析においては本質的な問題である。

10 文型は、1. 定形動詞の存在の有無、2. 無主辞 + 定形動詞、3. 非人称主辞（*Il/Ce*）の有無、4. 人称主辞 + *être*、5. 人称主辞 + *être* 以外の属詞自動詞、6. 人称主辞 + 自動詞のみ、7. 人称主辞 + 受動態、8. 人称主辞 + 代名動詞、9. 人称主辞 + 間接目的（直接目的は含まず）、10. 人称主辞 + 少なくとも一つの直接目的、が規準となっている。

この内で 2 の *N'importe* のような文型は種類も頻度も限られているので 3 の非人称文型との一体化は自然であるが、この点についての更なる事例調査はやはり必要である。次にいわゆる強調構文の *C'est...qui/que...* の *Ce* の非人称は明らかであるが、後続の *qui/que...* がない場合の *C'est-N* の *C'* の範列の開閉の判断は文脈との関連を更に調査する必要がある。次に、5 で *être* の特殊性に鑑み *être* だけで一文型にまとめているが、これは過渡的なもので、文型としては、自動詞（*Dieu est*）と属詞自動詞（*Luc est gai*）に分けるべきである。この点は明白であるが、文脈中での属詞の省略の可能性（すると *être* は自動詞になる）は極めて稀ではあるが事例中にはありうる。6 は少ないが、目的機能が文脈中で落ちている例も多い。7 と 8 は 10 との形式的な構文間の関係は密接ではあるが、10 に結びつけられないものも少数あるので、文型としては完全に無視しない方がよい。9 は重要であるが、多様性はない（間接目的二つの例は少ない）。10 は体系全体で圧倒的多様性と頻度を誇っている。

4. 研究成果

(1) 属詞と非人称文

être, paraître, sembler の三動詞の非人称属詞構文の共通の問題点はどの部分が属詞を構成しているかということになる。（以下では主節の人称動詞を述辞核と見なして属詞を [] に入れている。）

- a. *Il en est [de même] de lui.*
- b. *Il en est de lui [comme de nous].*
- c. *Il n'est pas [que vous sachiez son nom].*

上の a, b の *de lui* の *lui* は属詞部分 *de même, comme de nous* に対して意味的には主辞となり、構文的にはテーマ指示の属格機能を担う。非人称なので人称主辞機能は存在しない。c は少し古く *Il n'est pas [vrai] que...* の意であるが構文構成は異なることになる。

- d. *Paraît même [que Luc m'imite].*

上の d では、通常必要な非人称主辞 *il* さえ

存在していない。この非人称構文と人称構文 *Luc paraît même [m'imiter]* との本質的違いは重要である。

e. *Il semble [que Luc parte].*

f. *Prenez ce que [bon] vous semble.*

上の e の属詞は *que* 節全体であるが、節の中心核は *parte* であるので *parte* が属詞機能の中心を担っていることになる（上の c, d でも同様）。f は熟語化しているが、非人称主辞 *il* が不在である（意味的には *Prenez ce qu'il vous semble [bon] de prendre* に近いと言えようか）。

非人称主辞 *il* は述辞の従属要素なので欠きうる（*Paraît même [que ...]; ... que [bon] vous semble*）が、構文中核の属詞（＝述辞）が不可欠なのは当然である。

(2) 形容詞述辞と二重テーマ化

形容詞が属詞（＝述辞）となっているコピュラ文においては、主辞がテーマ・話題であり、形容詞がその属性を表していると言える。この形容詞に前置詞付きの間接目的がつづくこともある。

a. *Luc est fou de son argent.*

b. *Luc est fou de gaspiller ainsi.*

c. *Luc est fou.*

c-1. *(De) gaspiller ainsi est fou.*

c-2. *C'est fou de gaspiller ainsi.*

d. *Luc est content de son argent.*

e. *Luc est content de gaspiller ainsi.*

上の a と d は基本的に同じ構文構成である。ところが、形容詞に後続の間接目的の被制辞が名詞から不定詞になった b と e は異なっている。つまり、b は二重テーマ（c. *Luc est fou* と c-1. *(De) gaspiller ainsi est fou*; c-2. *C'est fou de gaspiller ainsi* で C' は de 以下を指す）であり e は単一テーマ（e. *Luc est content*; *(De) *gaspiller ainsi est content*; **C'est content de gaspiller ainsi*）である。

この違いは形容詞の種類や主辞名詞句にも依存しているが、形容詞だけが決める訳ではないし、不定詞が「意志的行為」であるとも限らない（cf. *Luc devient fou de ne rien comprendre*）。主辞が「人」とは限らないし、話し手の判断が決め手という訳でもない（cf. *Luc estime qu'il est fou de songer à cela*）。

単一・二重テーマの区別は形容詞文型の特徴を表すと考えられるが問題は残る。

(3) 位格項と必須性

構文・文型の特徴となる要素として、方向性位格項と必須項とは問題となることが多い。位格はあらゆる文型と両立しうるが、方向性位格はその「方向性」という特徴故に文型を強く特徴づける。

もう一つ文型構成要素との関連で言及されるものとして必須性がある。文構成に何故ある要素が不可欠かという問題は、フランス

語においては、主辞と述辞の二機能を別にするると、文脈との関係が本質的で複雑になり、詳細に検討されたことはないであろう（cf. 主辞機能ですら必須性は問題になりうる）。

文型が代表する下位クラスの構文に「特有」であることが本質であり、「非特有」で、あらゆる文型の文中に出現可能なものは文型特徴とはなりえない。この観点からすると、方向性位格は正に文型特徴となるが文脈により不在で暗黙に了解されていることはありうる。これに反して、ある述辞には極めて必須性が強い要素であっても、あらゆる文型の文の中に出て来るものはある文型に「特有」なものとはなりえない。

a. *Luc arrive à Paris*

b. *Luc arrive à danser*

c. *Ces gens arrivent.*

上の a の前置詞句 *àN* は *arriver* の右位置で到達点を表す典型的な方向性位格である。*arriver* との関係も密接であり頻繁に出現する。これとも関連して *àN* の範列 (paradigme) には具体的位格とは異なる b の *àVinf* のようなものもある。これは意味的には抽象的到達点とも言えよう。*àN* も *àVinf* も *arriver* との関係は強いが文脈次第で（あるいは文脈に頼らずとも）c のように不在であることは十分ありうる。

arriver は典型的な例であり、方向性位格が文型を強く特徴づけている例は他にも容易に見出しうる。

次に、伝統的にも「時 *temps*」「場所 *lieu*」「様態・仕方 *manière*」は状況項の典型であり、状況項は典型的に「非特有」な要素と見なされている。つまり、*quand*, *où*, *comment* に対応するものはどのような文中にも出現するということである（ただし、方向性位格については上を参照）。

「様態・仕方」の副詞で *bien* は高頻度で、あらゆる述辞動詞を修飾しうるものの代表とも言える。この種の副詞・副詞句が文型構成の要素と広く見なされている動詞に *se comporter* がある（cf. M. Salkoff: *Une Grammaire en chaîne du français*, 1973）。つまり、「*N₀-se-V-Ad_{manière}*」が下位クラスの文を代表する文型を構成するという点である。この分析の強い根拠はこの種の副詞・副詞句が必須であるという点である。

上の分析に反対する論拠は二点ある。一つ目は、「様態・仕方」の副詞・副詞句は典型的に結合がゆるく、あらゆる動詞、その他を修飾しえて、下位クラスの文型・構文を選定しえない。*se comporter* との結びつきの強さはこの動詞の個別の語彙的結合を反映するのみで（cf. 「*se-comporter-Ad_{manière}*」を凝結句と見なす分析もある）動詞の下位クラス化には至らない。二つ目は、根拠の必須性も文脈次

第では成り立たないという点である。この必須性についての反例調査の結果は、*Frantext* 1900-2007年と *Le Monde* 1994年の *se comporter* の全例 769例中、42例 (5.5%) で様態の副詞・副詞句不在の例が見つかった。

d. [...] comme il se comporte avec moi. (*Le Monde* 1994)

e. Le symboliste, lui, c'est bien simple : il ne se comportait pas du tout dans la vie; il ne cherchait pas à la comprendre [...]. (A. Gide)

上の d の *avec moi* (随伴格) や e の *à table* (位格) は通常の状態項であり、これらは述辞下位クラスの結合制限とは関係していない。つまり、多少とも自然な文を構成するために必要な種々の要素の一つにすぎない。

必須性は文の受容可能性と文脈との間の複雑な関係を反映する兆候的なものにすぎない。文型の下位クラス限定のための規準とはならない。

(4) 直接目的の属詞

直接目的の属詞 (*Je trouve Luc gai*) は二次述辞とも呼ばれ構文上の機能認定が曖昧なままになっている。直接目的は述辞との関係であるが、属詞も二次述辞もそうではない。また、直接目的の属詞の範列には種々の要素が含まれていて、従来属詞とされて来たものを越える可能性もあり、より広い観点から見直す必要があることが分かってくる。

属詞は述辞の一部であり、二次述辞は属詞以外のものを含みうる。また、「二次述辞」は一次述辞 (= 主文の述辞) に対する機能認定にはなっていない点も問題になる。

直接目的の属詞の範列では以下のようなものを比較せざるをえない。

- a. On trouve Luc tranquille. (形容詞)
- b. On élit Luc président. (名詞)
- c. On laisse Luc partir. (不定詞)
- d. On entend Luc chantant. (現在分詞)
- e. On voit Luc épuisé. (過去分詞)
- f. On trouve Luc à l'aise. (前置詞句)
- g. On voit Luc près de partir. (前置詞熟語句)
- h. On entend Luc qui chante. (形容詞節)
- i. On laisse Luc ainsi. (副詞)
- j. On laisse Luc là. (副詞・位格)

上で「主辞 - 述辞 - 直接目的 - 」は全てに共通であるが、直接目的の属詞とされる典型的なものは a, b で、せいぜい e が含まれるかというところである。しかし、このような属詞の概念が認められるのは、例えば、a では「*On trouve Luc tranquille* ↔ *Luc est tranquille*」の相互呼応関係が認められるからである。

être が想定されるが故の「属詞」なのであるが、属詞は述辞機能なのであるから、より本質的には「主辞 - 述辞」の呼応関係が直接目的以下に認められるということが問題に

なる。二次述辞という名称もここから来ていて従属節の類を認めているのである。

そうすると、上の a-h だけでなく i, j にも属詞の範列を認めうることになる。つまり、「直接目的の属詞」とはこのような大きな三項構文文型の第三項の一つということになる。

その上で、直接目的の属詞・二次述辞の統辞機能は何かということになる。

a. On trouve Luc tranquille.

k. On trouve que Luc est tranquille.

上の k で直接目的は *que...* 節全体であり、a では *Luc* が直接目的である。k の従属節内部では *Luc* が主辞であり *tranquille* が属詞である。a では *Luc* と *tranquille* は *trouve* によりそれぞれ組織されており、*trouve* に対して *Luc* は直接目的 (*On le trouve tranquille*) なので、a で *Luc tranquille* は従属節を構成しえていない。それでは、*tranquille* は何かということになる。

上の e のような「 N_0 -V- N_1 - N_2 」構文形を見ると、 N_2 に対応する要素の統辞機能は「第二直接目的」が相応しいと考えられる (cf. 格形で機能表示をするラテン語やドイツ語のような言語においては、当該要素は対格で表示される)。

典型的属詞である形容詞が直接目的機能を担うことに抵抗はあろうが、「 N_0 -*être*- N_1 」構文において無標の N が *être* の前後で対峙しているのは形式的には「 N_0 -*être*-Adj₁」に近いし、更に、これらは他動構文「 N_0 -Vtr- N_1 」での二つの N の対峙とも近い。これらの N_1 , Adj₁ は全て代名詞 *le* で置換可能な点にも注目すべきである。

上の a-j 構文で名詞句に対応する形の第三項 (不定詞など) は勿論のこと、対応する *être* 構文で代名詞 *le* に置換可能なものには第二直接目的機能を認定するのは一案である。y に置換不可な *là* (j. *On laisse Luc là* → *On y laisse Luc*) のようなものはそのまま方向性性格を認定して良いだろう。

「直接目的の属詞」と言われる構文の広がりや機能認定上の問題点の解明、これらの一部の解決のヒントは得られたと言える。

(5) 直接目的と間接目的

述辞を特徴づける文型の特有機能を担う項の形は伝統的に直接目的と間接目的で大きく区別され直接の方は形からしても他動構文を特徴づけるという点で一致している。問題は間接の方で、文型を特徴づけない非特有機能である状態項との区別が問題になる。

フランス語他動詞 *regarder* はその意味からしても直接目的が具体的視覚対象であることが基本である。これに対して、一般的に、「上、下、横」などの空間関係は前置詞により状況項として表されることが多い。このような基本的空間そのものを *regarder* が対象と

して捉えるとどうなるであろうか。

- a. Luc regarde dans la boîte.
- b. Regarde sous la table.
- c. Luc regarde autour de lui.
- d. Luc regarde à côté de la table.
- e. Luc regarde vers Léa.
- f. Luc marche en regardant derrière.

上の a は、文脈次第では直接目的が暗黙に了解されている可能性もあるが、このままでは「箱の中」そのものが対象となっている。これは名詞表現 (l'intérieur de la boîte) よりも自然だろう。b は Regarde sous la table, il y a un chat のような文脈を考えると、「テーブルの下」の空間が先ず対象となっていると言える。c も「自分の周り」が対象であり、「周りの何か」ではない。名詞句直接目的の l'entourage よりも前置詞句による方が自然である。d では à côté de la table は le côté de la table には対応しない。e では vers Léa は直接目的の Luc に対立しており, vers の名詞句表現は不可能である。f は場所の前置詞句が副詞により表現される例である。通常 Regarde là など名詞句よりも自然に使われている。

上のような具体的方向性位格表現とは別に間接目的として次のような構文もある。

- g. Luc regarde aux détails.
- h. Luc regarde à dépenser.

上の g, h は直接目的 (regarder les détails, regarder dépenser) とは当然区別される。これらの間接目的は具体的方向性位格と連続している抽象的方向性位格とも見なしうる (cf. g, h では前置詞は à のみに制限されていることに注意)。述辞との密接な関係からしても、具体的方向性位格が間接目的として注目されるべきではなからうか。

regarder の実例調査では直接目的を取る例が 72.8 % (Le Monde 1994 で選んだ 972 例中 708 例) で圧倒しているが、方向性位格のみを取る例も 11.5 % ある。regarder の具体的方向性位格は文法書、動詞構文辞書でもあまり注目されていない。他の他動詞構文との比較が不可欠だが、直接目的、間接目的、状況項の境界と連続性の観点からより注目すべき問題である。

(6) フランス語基本 1000 動詞の資料 (未公刊)

フランス語の高頻度上位の基本動詞の資料の整理は次の二種の資料に基づいている。

I. *Trésor de la langue française* 1971-1994 の記述, II. *Le Monde* 1994。頻度は J. Baudot: *Fréquences d'utilisation des mots en français écrit contemporain*, Montréal, Les Presses de l'Université de Montréal, 1992 に依る。なお、用例検索は構文解析プログラム *Unitex*, Paris, Université de Paris-Est Marne-la-Vallée に依る。

I は文型記述の資料としては詳細な意味を区別して記述してあるものを構文ごと

とめ直す必要がある。II は *Le Monde* 紙一年間での各動詞の 1000 例までを取り上げて分類し構文ごとに頻度を調査するのが目的である。作業は実例の取り出し迄終了している。基本動詞でも 500 番以下では 1000 例に達しない動詞も多い (*Le Monde* 1994 一年で 70 ~ 80 万文程度になる)。最終的には 10000 を越える全動詞について整備する予定である。

なお、本研究の主目的の一つであった非動詞文の更なる分析は殆ど実施できなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

敦賀陽一郎: 「フランス語動詞 regarder の間接目的」, *Flambeau* 41 号, 東京外国語大学フランス語研究室, 査読無, 2015 年, pp. 76-95.

敦賀陽一郎: 「フランス語における直接目的の属詞の範列」, *Flambeau* 40 号, 東京外国語大学フランス語研究室, 査読無, 2014 年, pp. 38-56.

敦賀陽一郎: 「方向性位格と必須状況項」, *Flambeau* 39 号, 東京外国語大学フランス語研究室, 査読無, 2013 年, pp. 24-44.

TSURUGA Yoichiro: “L'attribut et la construction impersonnelle en français”, *Autour des verbes, Constructions et interprétations*, (dir.) Kozué Ogata, *Linguisticae Investigationes Supplementa* 29, 査読無, 2013, pp. 19-46.

[学会発表](計 1 件)

TSURUGA Yoichiro: “Luc est fou de partir maintenant”, *Pré-actes du 32^e Colloque International sur le Lexique et la Grammaire*, éd. par J. Baptista et M. Monteleone, Univ. de Algarve, Faro, Portugal, 2013, pp. 65-68.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

敦賀 陽一郎 (TSURUGA YOICHIRO)
東京外国語大学・名誉教授
研究者番号: 30155444

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし